

在特会の論理（19） ——カナダで変わったS氏の場合——

樋口直人（徳島大学総合科学部）¹

1. 経緯

本稿は、2012年12月5日に在日特権を許さない市民の会（在特会）でも活動していたS氏（30代男性）に対して行った聞き取り記録を、意味が伝わりやすいように適宜並べ替えて再構成したものである²。S氏は在特会の初代事務局長であり、それから二度の大病を経験して在特会の幹部からは退いたが、川崎市で独自の活動を続けている。以下では、S氏の言葉をそのまま用いて活動家としての経歴をたどっていきたい。

2. 政治に対する関心

政治そのものに関しては、いわゆるノンポリ。ただですね、行動する保守だとかそういう人たちがよくいう愛国心——愛国心云々ということに関してはあまり意識してなかったんですけど、昔から持っていたのは愛校心なんです、学校の。今でも小中高ぐらいも普通に校歌を歌えますし。もともと野球やってたんです。少年野球。小中。高校は硬式だったんですけど。その多分ベースがあって、今のこういう道に入ったんだなと思っております。

それとですね、多分これ——少年野球とカリトルリーグとか、実際に

¹ 〒770-8502 徳島市南常三島町1-1、higuchinaoto@yahoo.co.jp。

² これまでのまとめとして、樋口（2012a, 2012b, 2012c, 2012d, 2012e, 2012f, 2012g, 2012h, 2012i, 2013a, 2013b）を参照。これらはまとめて、樋口（2014）の資料編として位置づけられる。本稿も含む一連のまとめでは、聞き取りの中で発せられた差別的な言葉や見方をそのまま掲載している。資料としての意味を損ねないゆえのことであるが、それが苦渋の選択であることはご理解いただきたい。

されたことがある人間の大体が教わることだと思うんですけど、一番最初にチームに入って教わることというのは、キャッチボールのやり方でも素振りのやり方でもなんでもないんです。何を教わるかというのと、「グラウンドには野球の神様がいて、君達はその野球の神様に野球をさせていただいているんだ」と、「だからグラウンドには常に礼を尽くしてグラウンドはきっちり整備をしなければいけない」という教えをまず受けるんです。ある意味これっていうのは、今にして思えばですけど、まあ神道の考え方に近いのかなと。そういうような積み重ねがあって、愛校心だとか人の英知を超えた何かに対する敬意を少し学んでいったのかな、と今にして思えばですけど、そんな風に考えています。

(成人した時に) ちょうど都知事選がありまして。青島幸男さんが都知事になられたあの年の選挙、生まれて初めての選挙で、その時には行きました。出席率 100%ではないですけど、6割 7割の確率で多分行っています。ただそれっていうのは、誰それに入れたいというよりは、国民の権利というより義務という風に考えておりましたから、選挙は。その中で、もちろん当然考え方はそんな程度でしたから、白票入れたこともありますし、正直さぼってしまったこともあるんですけども、基本的には行かなきゃいけないというぐらいの観念は持って、一応は臨んでおりました。

あの時(都知事選の時) 確か黒木さんと言う弁護士出身の——確か共産党から出られた方だと思ったんですけど——あの方に入れました。というのも、あの頃共産党に入れてたたった1つの理由は、あの世代で唯一本格的に政権与党になったことがないというのが理由だったんですね。政権についた世界を見てみたい。ここまでね——当時の考え方ですよ——ここまできれいごとを並べ立てる政党が実際に政権を取ったらどういいう政治をするか見て見たい。そういう考え方、浅はかといえれば浅はかなんですけど、そんな感じでした。

(支持政党は) 特にはなかった。個人が例えば、こういったような理

念を持っているだとか、こういった公約を掲げるだとかというのを——政見放送だとかってありますよね、大体それのみを見て選びます。政党がどうのこうのというかんがえ方は、正直なかったです。正直、どこそこの政党を支持するというのがなかったんです。どうしても有名な人がいるですとか、そんな程度でしたね。個人がいて、その人が例えば自民党にいるなら自民党。もうなくなったけど社会党にいたとしたら社会党とか、さきがけならさきがけとか。

それこそ強いて言うならば、近所で同級生の子がいたんですけど、そのお母さんが学会の信者で。結構うちの方にも選挙のときよろしくね、みたいな感じで誘いはあった。それをすごくうちの母が嫌がって、その姿勢というかを嫌がって。公明党——毎度毎度うるさいなあ、嫌だなあという感情は醸成されてましたので。どこそこがいいというより、とりあえず公明党はうざったくて嫌だなというのには正直ありました。

そんなような感じだったんですけど、ただろ覚えの記憶をたどっていくと、どうしても自民党の方が多かったんじゃないかなという気はしています。それはこの人がいるからという。あくまで始めに立候補者ありき、その後の政党。割と多いのが政党ありきでその中の、例えば私なんか神奈川10区の人がいるとかじゃなくて、逆だった、考え方が。私は投票したことないんですけど、例えばAさんという人がいてAさんが気に入ってたまたま公明党だったら多分公明党に入れていたと思います。Aさんが自民党から出るのなら（比例区は）自民党。比例だと選挙区と関係ないんですけど、正直そこまで考えるのが面倒だったので、選挙区から出る人がいる政党。それが当時のやり方でしたね。

（排外主義運動の）活動始めた＝練馬から川崎に引っ越したという感覚なので、それからたまたましばらくなかったんです、選挙自体が。で、その後いろいろと川崎市議どんな人がいてどんな勢力なのかと調べまして。まあ、とりあえずまだまともなのが自民党かなと。それと名前はちょっと伏せさせていただくんですけど、市議さんでいろいろと協力して

ださる方がいらしたものですから。その方には入れられなかったんですけど——選挙区が違ったんで。私は川崎区（民）なんですよ、川崎区から自民、その人も自民だったんで、自民党を選んで。当然市議選なんで自民党からも何人か出るわけじゃないですか。その中でどの人がいいかなという選別をして入れると、そんな感じですね。（投票に対する意識も）当然変わってくると思いますよ。今までどちらかというと惰性というかのんびんだらりというか、あまり考えずに入れてたという部分は否定できませんので。

（職場で）実は誘いはありました。といいますのも、前職はタクシーのドライバーだったんですけども、ちょっと前いた会社というのは変わってまして。共産党系の労働組合と民主党系の労働組合が、なぜか知らないけど1つの営業所に2つありまして。で、会社全体としては共産党系の方が強いんです。交通労連（共産系）という労働組合がありまして、そちらが強かったんですけど、私が所属していた営業所の中では自交総連（民主系）の方が強かったんです。そうした誘いが正直いろいろとありましたけど、無視してました。まさかどっちかに入れなきゃ会社クビになることもなかろうと思ひまして。これでクビになったらクビになったで訴えてやるというだけでしたから。

3. 外国人との接点

（外国人と接触）し損ねたことはありましたが、本格的に外国人と接するようになったのは2006年にカナダに行った時だったんですね。2006年当時、韓国ってイメージするものって何？と聞かれたときに、「韓国ねえ、首都がソウル、野球がそこそこ強い、いわゆるお隣の国」、あと何？本当このレベルでしたから。まあ、一応なんだっけ、今にして思えば「釜山港に帰れ」というのは、そういえばそうだなというのはありますけど。今の一兆円企業の Samsung、あれ読めませんでしたから。三星（さんせい）と読んでましたから。三星ライオンズ結構強いので、何人

か日本に来ていたんですね。それで名前だけは知ってましたが、あれをサムソンと読めなかったレベルです。ましてや LG だとか SK だとかあのあたり（を知ったの）は、こっち（運動）に踏み込んでからですね。

今にして思えば、あいつ在日韓国人だったんじゃないかなというような人はいましたが、それこそ本当わからないくらい。普通に名前だとかイントネーションの違いだとかも何もなくて、ましてや反日的な言動もなかったです。あくまでしかも推測なので、その友達のおじいさんの名前の一部、朴正熙大統領っていましたよね、あの「熙」の字が入っていたので。確証とったわけではないですし、そこまで根掘り葉掘り聞けるような知識もなかったですから。意外と練馬って創価学会が多いというのはありますけど、基本的に農家が多い割と保守的な土壌があります。そういうような革新的な方まで踏み込んでどうのこうの、という——ある意味で川崎と真逆なんですよね、空気が。そういう中で育ちましたんで。

4. 活動に連なるきっかけ

本当に一番のきっかけは、2003 年だか 2004 年だかくらいに妹がロンドンに短期留学しまして。で、その時に初めて私も年末年始かな——ぐらいにあそびに行きまして。へー、外国って面白いなというのと、妹がそこまでいろいろとやってるところを目の当たりにして、ちょっと正直悔しさもありまして。だったら海外でいろいろ体験してみたいと。妹の留学を見て、職を変えてタクシーの運転手やってお金貯めてって感じ。まあただ、頑張り次第なんですけどね。サボろうと思えば、逆にいえばいくらでもサボれる仕事ですから。10 万（円）以上は多分月収上がったと思います。

で、ワーキングホリデーという制度があるのを知りまして。今だとカナダをはじめとしてオーストラリア、ニュージーランド、イギリス、ドイツ、韓国だったかな、当時日本と 7ヶ国でそういった提携があるんで

すけれども、その中で本格的に野球をやっているととなるとカナダ。もしくは隣の本場アメリカ。(制度を使えるのは) 30 (歳) までなんです。ぎりぎり年齢が。当時は 26、7 (歳) くらいでしたので。何とか期限のうちに行こうと思いだめたのがきっかけ。

やっぱりベースは野球なんです。カナダと隣はアメリカじゃないですか、はっきり言って行こうと思えばいくらでも行けるわけです、観戦です。うまくいけばなんかもぐりこめるかなというのが、ちょびっとだけありましたけど。いわゆるメジャーリーグとマイナーリーグを見てみたい。要はベースボールを見てみたい、野球じゃなくて。バンクーバーに行きまして、2006 年。30 (歳) の年にビザを取って、とった 12 月までの間に入国しなきゃいけないんですね。入国したのは実は 31 歳なんです。9 月のぎりぎりにビザを取って、入国したのは 31 歳。それが 2005 年の 12 月でした。2005 年の 12 月から翌年の 7 月だから 8 ヶ月です。アメリカにいたのが約 40 日。合わせて 9 ヶ月くらい。そこでね、予算を使い果たして帰って来たんですけど、そもそもワーキングホリデーって 1 年しかいられませんので、どっちみち。ちょうどいい頃合かなと。

(排外主義に至るのは) やはり 2006 年がきっかけ。一番最初に影響受けたのは、インターネットなんですけれども、世界史コンテンツというウェブサイトがありまして。その中でいわゆる日本が今までやってきた、いわゆる自虐史観がいかに虚構に満ちたものであるかというものを、1 つ 1 つ暴いていくサイトがありまして。まずそれが 1 つ。

(サイトを見たのは) 今でも覚えていないんですけど、たまたまです。バンクーバーって、1 月とか 2 月くらいが梅雨というか雨期に入るんですね。私あの時は 27 日連続降雨で、あと 1 日降れば観測史上タイ記録だったらしいというそういう年で。はっきり言って、外に出てなかったはずですね、折角行ったにもかかわらず。お金がなかったというのもあるんですけど。そういった中でネットサーフィンに時間つぶしてたなかで、たまたま何かの拍子で行き着いたのがその世界史コンテンツ。(探したの

は) ただのネットサーフィンです。いわゆる行動する保守とよばれる人の——あくまで印象ですけど——7割8割はネットからのはずです。どういう形かは、人それぞれバラバラだと思いますけど。(そうした動員は)時の流れかなと。私自身がパソコン通信全盛の時代から入った人間ですから、その後で Windows 95 ができて、インターネットの世界が我々も入るようになって、時代の流れ。さまざまな情報がある意味黙っていても入ってくるのは、時の流れかなと。

やっぱりどうしても、今まで日本は悪いことした、従軍慰安婦だ強制連行だ、そういったような歴史を植えつけられてきてたわけで、私も実際従軍慰安婦がどうのこうのというのは、中学や高校では習った記憶がありますので。そういった既成概念を破壊する、多分その人たちも自分が持っている概念を何かの拍子で破壊されるのは、良きにしろ悪きにしろインパクトがすごく強いと思うんですね。そういったような感覚で捉えていただければいいかなと思います。(それから)調べて。本当なのかどうか。(そのサイトは) もちろん全部見ました。

それからしばらくして、同じようにたまたまぶつかったのが、Doronpa さん。今でいう在特会の桜井会長なんですけど、その方が主宰されていたインターネットラジオ、「不思議の国の韓国」というサイトを当時されてまして。ひたすら聞きまくってまして。今はもう閉鎖されているのかな。あの当時で 40 本か 50 本か上がってたのを、ひたすら聞きまくってました。それでいろいろ感じるころがあって、当時の Doronpa さんとメールのやりとりもしましたし。

その次に大きかったのが、トリノオリンピックと特に WBC——ワールドベースボールクラシック、野球版のワールドカップ。若干(世界史の)サイトの方が早いですけど、ほぼ同時とっていいと思います。トリノの時は、どちらかという日本ってすごいんだなという考え方だったんですけども、WBC の時に二次リーグで韓国とやって、日本が負けて、その時に韓国の選手団がマウンドに旗刺したって事件覚えてない

ですか。そういった事件があったんですね。

先ほど申し上げた通り、グラウンドっていうのは野球をやる人間にとってはこれ以上神聖なところないんですね。ましてや野球のマウンドっていうのは、その中でもさらに上位、それこそ何ていうんだろうな——感覚的にはそれこそキリストだとかマリアだとかに近いくらい神聖なものなんです、マウンドっていうのは。それに対して旗を刺すとは何事だっていう怒りがこみあげてきまして。そこからですね、本格的になったのは。あの時の怒りは正直今でも覚えています。それが直接的なきっかけになった最初です。それも 2006 年でしたから。

(放映されていたのは) カナダも当然当事国でしたし、参加国でしたから。多分、あの当時の日本が WBC に対してどういうコマーシャルかけていたかは知りませんが、あの頃はすごかったですね。コマーシャルが。割とスポーツに対するコマーシャルって結構多いんですね、カナダって。例えば向こうに NHL というアイスホッケーのプロリーグがあって、バンクーバーカナックスというチームがあるんですけど、シーズン中はほぼ毎日というか毎日次はデトロイト戦だとか次はニューヨーク戦だとかいうコマーシャルをやってますんで。割とスポーツに対する意識っていうのは高いんじゃないかと思います。そうした中で WBC に対するコマーシャルも毎日のように見てましたし。どんなベースボールするんだろうなというのは、さすがに会場までは出掛けられない、ちょっと一次リーグの会場忘れたんであれですけど、もちろんアメリカだったんですけどね。やっぱり見てはおきたいなって。ただ日本じゃやらなかったはずなんですけど、あの時の一次リーグってアメリカとカナダともう一カ国が南アフリカなんです。カナダ対南アフリカなんて、こんな試合日本にいたら絶対見られませんから、それだけでも行って良かったなというのはありますね。

私、サッカーのほうは逆に見ないので。日韓のワールドカップってほとんど見てない。日本戦は見ましたけど、韓国の試合だとか他の試合っ

て正直見てないんです。ですから、他の人たちが 2002 年にそういった意識が醸成されるのを、私は 4 年遅れで醸成された、そんな感じだと思います。

あとですね、2006 年の 7 月から本格的にアメリカ一周し始めたんですけど、あれは確か 7 月の中旬かな。ベースボール見に。放浪の旅ですね、野球を求めての。その時、でもなんていうのかな、春先にシアトルに行ったんです。シアトルということは当然入管を通るじゃないですか。国境を越えるわけですから。その時に 1 つ面白い体験をしまして。当然順番並ぶわけじゃないですか。ヒスパニックがいたりチャイニーズがいたり、ずっと並んでいるわけです。友達と——友達も日本人なんですけど——並んでまして。順番が来ます。前に並んでいた彼らより私らのほうが早かったんです。手続きが。これ、どう考えても菊の御紋のパスポートの威力です。あれは。他の連中ってというのは、「これはなんだ、あれはなんだ」ずっと長々とやってたんですけど、私なんかがしゃべったのは、今でも覚えているのは、奥さんが日本人で北海道に温泉旅行に行った、そんな雑談ですよ、そんなレベルでしたから。それでトランクをちょっと見せたぐらいで、「はい、いいよ」。あれはちょっと今でも impressive な出来事でした。それだけ自分らの先輩、ご先祖様は積み重ねてきたんだな、信頼を勝ち取るために。

シカゴに行ったんですよ。シカゴでユースホステルに泊まったんですね。シカゴのユースホステルのロビーに、でっかい世界地図があるんです。よく見ると、当然ただインド洋だとか中国だとか地名とかかいてあるわけですよ。よくよくみると、日本海のところが削られて、East sea ってかいてあるんです。まあ、こんなことするのは韓国しかいないはずなんですけど——中国人は基本的に Japan sea で通ってますから。いわゆる日本海を、東海と呼ぶのは韓国だけです。多分北朝鮮の間だったら Korean sea だと思うんですよ。ほぼ 100% 韓国の人だということで、写真を撮って当時の Doronpa さんのところにデータ提供して、実は

ブログでも読み返していると今でもあります。その時の写真は。

5. 参加へ

またタクシーの職業に戻って。そこからそういった国に対する意識、まあそれから世界史コンテンツと不思議の国の韓国から受けた影響にもとづいて。その頃、その秋に在日特権を許さない市民の会を立ち上げるというのをネットラジオで聞いて、それを本当にやるのなら俺も参加しようというので、11月だか12月だかに準備会合があって、その時点から私、参加してます。(桜井と)メールでのやり取りはやってましたんで。昔からインターネットという世界がある前に、パソコン通信ってあったの御存知ですよ。あの頃からオフラインミーティングという、どちらかというとなら私がその概念持ち込んだんですけど、それもやってましたんで、そういったことに対する抵抗はなかったです。私がパソコン通信始めたのが二十歳だったんですけど、21(歳)の時にアマチュア野球の会議室がありまして、そこにオフ会って概念を持ち込んだのは実は私です。

ちょっとわけあっていったんやめたんですけど、最初に背負った会員番号は3番です。一番は当然会長。2番は御影副会長。3番は私です。一応、初代事務局長は私です。その準備会合の時に、事務局長やってくれないかという話が会長から直々にありまして。受けて始めたというのが在特会における私の歴史です。在特会は在日特権を許さない市民の会っていう名称でいいかどうかという議案にも、私当然参加しましたので。あと、一番大きくもめたのが、国籍条項入れるかどうか、会員に。その時にも私——あの時何て言ったか覚えてないんですけど、確かあの時は国籍は不問でっていう派に一票確か入れたと思うんですよ。いずれにしてもそういった形で参画はしてます。

会の中で一番最初に本格的にやったのが——時期まで覚えてないんですけど——品川区で外国人高齢者福祉給付金を始めるという動きが実は

ありまして。それが確か毎日新聞だ、毎日新聞にそういった動きがあるって報道がありまして、それで直接交渉したのが私です。それで品川区での福祉給付金の成立は何とか見送られたと。私が認識する中では、在特会があげた成果、一番最初の成果がそれだと私は思ってます。

基本、在特会というのは本当は周知街宣的なことを、公的なことをやるのと、特に在日の歴史を掘り下げる研究部門との、本当はこの二本柱だったはずなんですよ。ところが主権回復を目指す会の西村修平さんと組むようになって、街宣——それも周知街宣というより抗議街宣とかデモに傾倒して行って、研究的なものがおろそかになっているのは今でも同じなんですけど。

(西村修平と仲がよかったのは) 私より会長ですね。2007年だか2008年だかに外国人参政権反対のシンポジウムの方に、パネリストとして出席の方はさせていただきました。私と外国人犯罪追放運動の有門さんとあとお二方忘れて申し訳ないんですけど、4人いたんですよ。その時に、私は西村修平さんからぼろくそに言われました。何を言われたかは覚えてないんですけど、とにかく「お前なんぞ話にならん」というようなことを言われたんですね。今でも覚えてますね。それから、そこまで言われるのならちょっと距離をあげようかなと。(抗議街宣を) やったことがないとはいいいませんが、どちらかというあまりそれだと実際的な効果を上げられないんじゃないかなという考え方は、実は今でも持っています。

(続けてきたのは) 正直覚えてないですけど、確か2008年ぐらいだったと思うんですよね。いったん(会員登録を) 消して1ヶ月くらいしてからかな、番号を復活させるわけにはいかないので、新規でとなりましたけど。当初からやっていた人は私のことをみな知っています。会長はそうですし、米田さんとか八木さんもみんな私のことは知っています。

(やめた理由は) 平たく言うと、風邪ってありますよね、あれって普通は鼻とか口からの菌が入ってウィルスが悪さして起きるじゃないです

か。どうも皮膚から入ったみたいです。症状としては風邪に近いですね。あの時は脱水症状と40度以上の熱と咳もありましたし。たまたま家の近くに総合病院がありまして、そこであらゆる検査やってそれでもわからなくて、1週間くらいしてやっとわかったと。ひたすら点滴打って。ある意味風邪になったのと似たようなものなので、それでもやっぱり1ヶ月くらい。それこそ最初の1週間くらいは朦朧としてまして。(それから)しばらく本当に大人しかったです。籍だけあるって感じで。例えばデモだと400人いたら400分の1みたいな。挨拶するでもなし、普通に参加するOne of themというだけの——こつこつとした感じではやってみました。逆に言うとそこまです。

(運動経験は)全然なかったです。(抵抗も)なかったですね。ここまでなったのは、今まで黙ってきた日本人側に若干問題はあるんじゃないかと思ってましたので。逆にいうと、今の「日本侵略を許さない国民の会」ってあるじゃないですか、あそこまでやるのは正直どうかになってい部分がありますけれどもね。ある意味、ヘイトスピーチ大歓迎なやり方してますので。そもそもデモ自体、私はそんなに評価してませんので。反対はしませんけれども、自分が思い描いている部分とちょっと違うかなと。

実際に桜井会長も、以前の自身の、ニコニコ生放送で、そんなにデモで上げる成果はないと本人が言ってますから。ただ、例えば尖閣、竹島を奪還しろというデモをやったからといって、それを一般聴衆が聞いて自分の考えを改めるとか、目覚めさせることはまずないと。じゃあ何のためにやるか、自分達の周りの団結のためだというような説を唱えてらして、なるほどなど。逆にいうと、今、考えを持っている以上、よっぽど余裕があるという状態でない限り、まあ「俺はいなくても大丈夫かな」と、ある意味で。正直、今の在特会のやり方だと自分のイメージとは違うなっている。もっと行政立法に働きかけていかないと、自分の理想は達成できないんじゃないかと。デモだ街宣だ、そのものは反対しません

けど、それだけじゃダメだなと。

6. 川崎市での活動

山野車輪さん、あの方が『在日の地図』という本を出されまして、その中でいろいろな、三河島だとか川崎だとかウトロだとか取り上げてらしてるんですけど、その中で川崎を取り上げてまして。その中で神奈川県の税務署員が日本でただ1人、殉職したっていう事件がありまして。それが紹介されていたんですね。簡単にいうと戦後直後って荒れてまして、その中で特に川崎の場合は密造濁酒の製造が盛んだったんですね。で、その取締りをした税務官がいたんですけど、その人が闇打ちにあったんです。今でも家の目の前に川崎南税務署があって、慰霊碑があるんですけど、その慰霊祭をやろうと、あくまで私個人で。その時は村田春樹さんが協力してくださったんですよ。やろうやろうとなって、30人くらい集めてくれました。その中の1人が、私は大田区民だけど、川崎にこんな話があるって知らなかった。だったら川崎を何とかしようとする団体を立ち上げようじゃないかという話をいただきまして、できたのがクリーン川崎なんです。

神奈川は——神奈川県でいろいろやっている人って、まあみんな個性が強いんです。例えば日本の自存自衛を取りもどす会の大井町議の金子さん、あの方も個性結構強いですし。あとは元外国人犯罪追放運動の副理事の中村さん、やっぱり個性強い方ですし。人材はいるんだけど、なかなか1つにならない。その中で幸か不幸か川崎で専門にやっている人がなかなかいないので、自分も住んでるし、じゃあ担当しよう。

(立ち上げは) 3、4年前ですね。在特会は、建前上は在日特権に絞った活動をするというコンセプトがあるわけです。当会の場合は川崎市に対しての活動をしよう。私、市民ですから。生活してますからねえ。伯母はずっと川崎ですし、うちの母は伯母と仲がよかったもので、割と川崎に遊びに行っていたんです。実際、生まれて初めて見たプロ野球は

今はなき川崎球場ですし、その意味で普通感覚とはちょっと違う、ある意味第二第三の故郷に近い感覚があるんです。

当会としては、正会員は市民とその隣接する自治体、具体的にいうと横浜市、大田区、町田市、相模原市もなるのかな。ぐらいに限定してます。あとオブザーバーということで、それらに縛られない会員さんもいますけれども、そういった方々には会として重要なことを決めるときに議決権はないです。もともと特に外国人の跳梁跋扈がはなはだしいというのを何とかするというコンセプトがありますから。

逆にいうと在日問題だとか同和問題だとか、いろんな条例の問題だとかを取り上げるけれども、日本全国レベル、あるいは他の自治体には基本ノータッチ。そこまでやるとキリないんで。在特会関係（のメンバー）は、はっきり言っていないです。1人は外国人犯罪追放運動の方ですし、1人はライオンズクラブの方ですとか、あと1人市議さん、あと1人は同じ川崎市の人でどこの団体にも所属していない方がいまして。そういった方々と集まって。まあ、ミニ在特会ですね、ある意味で。あまりネットばかりには頼らない。なるべくできる範囲で足で稼ぐ反面、研究等ともやっていきたいなど。（デモや街宣はしないのは）今うちの会の力がないからですね。そこまで集められる人脈、私個人のスケジューリングの問題もありますし。でもどうしてもね、小回りが効く分、力がない＝限界がありますから。

（川崎の外国人政策との関係は）むしろ大ありです。むしろそれです。先ほど少し申し上げた外国人高齢者福祉給付金、あれの発祥は川崎なんです。平成6年に、民主党の飯塚正良議員の発案でもともと立ち上げたものなんですけどね、あれが当初は1万円だったんですが、今は2万1000円だか2万3000円まで膨れ上がってまして。あれの支出額が——高齢者に出るものですから、亡くなる方も出てますけど——確か今でも2000万くらい出ているんです。これってある意味で我々の市民税から出ていますから。あとは例えば自治基本条例、川崎の場合、自治基本条例の三

条で市民とはなんぞやという定義があるんですね。それって、よくよく読み返していくと、住民票持っている人は当然なんですけど、例えば(横浜の)反町に住んで、東神奈川に住んで渋谷に通う人がいます。その人は当然川崎通りますよね、その人も市民に該当するんです、条例を解釈すると。あれはいくらなんでもおかしいだろうと。

今私が考えているのが、多分条例ですから、かなり強い拘束力がありますよね。これはつぶすのはまず無理だと。つぶさないでやるにはどうしたらいいかと考えて。まだ誰にも話してないんですけど、自治基本条例第3条に1つ加えるんです。日本国籍を有する者、これだけで随分違うんです。国籍条項がないがために、同じ自治基本条例の第31条にもとづいて住民投票条例が成立しているんです。今のところ不幸中の幸いで住民投票条例が施行されたことは一度もないんですけども。

病気のことがありますので、かなりブランクはありますけれども。何が一番のネックかという仕事なんですけどね。今までは割とやれてたんですけど、病気の絡みもありまして、今はポツポツと。(民主党政権では)その頃は私は仕事のほうから手が離せなくなって、運がいいのか悪いのか。全国レベルの方は在特会にお任せ。同じことやっても意味がないし、競争という観点からみたら絶対に勝てないので。大きさも違うし質も違うし、(桜井)会長とタメ張ろうたって絶対に勝てるわけではないので。

正直、事実上1人親方みたいな感じでやっています。今ですと例えば、川崎署とタイアップして立ちんぼうですとか、ちょんの間ですとか、あのあたりの摘発——私は情報提供するだけなんですけど、何とかせいと。堀之内ってご存知ですか、あそこの手入れがいつせいにあったんですね。あれで1回つぶれたんですけど、また復活しまして、今4、5軒あるんです。(働いているのは)韓国人。

川崎ってちょっといろいろ妙な歴史がありまして、その絡みで性的歓楽街が1つの町に2つあるんです。堀之内と南町って。普通は1つなんです。その中の堀之内の方にはいろいろとやってはいるんですけど、南

町のほうには黒い歴史がありまして、なかなか警察が動いてくれないんです。何とかせいと私は言っているんですけど。まあ、平たくいうとヤクザが絡んでるんです。割と堀之内の方に関しては動いてくれてます、所轄は。もちろん似たような顔立ちなんで、中国人という可能性は否定できないですけど、仮に日本人だとしても当然売防法、風営法に引っかかります。言ってみれば川崎を浄化しよう。

7. 「外国人問題」に目が向く理由

正直、今でも在日だからというカテゴリーというよりは——外国人に対する、韓国人だなんだという個人に恨みつらみは、はっきりいってまったくないですよ。どちらかというと、中国人の方がしょっちゅうドンパチやってますんで。バンクーバーの時にも日本食レストランでアルバイトしていた時にも対立しましたし。それと並行して水産加工の工場で仕事してたんですけど、その時もあいつら仕事しないし。大学時代なんかは（アルバイト先の中国人と）本当にぶん殴りあいの喧嘩もしましたし。そういった意味で、個人的にはドンパチやっているのはどちらかというと中国人です。

あとは個人というと——工場の話なんですけど——2006年のワールドカップで、オーストラリアとやったときに確か3対1で負けたんです、日本が。ちょうど翌日、工場で飯食っているときに、（韓国人が）例の「大韓民国」（韓国の応援歌）とやったんです、それでむかつきましたね。あくまで個人レベルの話です。あとはどちらかというと義憤ですよ。そういった特権的なものはおかしいんじゃないかという。

（外国人参政権についても）2006年以前は（認識が）なかったですね。そんなものあることすら知らなかった。というか、外国人参政権もそうですし、在日韓国・朝鮮人がいることすら私は知りませんでしたから。日本人だけという頭しかなかった。（外国人参政権）そんなもの、なんで認めないといけないのという。だってあの、例えば生徒会の選挙あります

よね、あれっていうのはその学校に所属している生徒しか投票権ないじゃないですか。それに対しては、私が A という中学に私がいたとして、B という中学校の生徒が A という学校の生徒会なり何なりを選ぶということですよね、簡単にいうと。何で？むしろそっちのほうがわからないから、その理を教えてくださいという感覚なんですよね。

(「外国人問題」が重要になるのは)それは正直、桜井会長のカリスマ的な部分は大きいですね。彼の影響は正直自分なりにかなり強く受けていると思います。もちろんこの時点でいえば、特例公債法だとか消費税増税とかいろいろ問題ありますけれども、今の外国人問題の方に強い関心を置くようになったのは、桜井会長の影響なのは間違いありません。あそこまで理路整然と、こういった問題で述べる人って今までいなかったですから。例えばチャンネル桜に出てらっしゃる西村幸祐さん、あの方も理路整然と言う意味ではひけをとらないというか、あの方はむしろプロですんでね。ただ桜井さんのすごいところは、講演をやらせても街宣をやらせても、まったく一定以上のレベルをずっと保ってらっしゃる方なんです。

今年の4月3日に川崎市役所に抗議をかけるというので、お話はいただいてまして。要はそういうオファーがあったんですね。よりもよってその日は私手術だったんで、行けなかったんですけど。そういうような感じでちょちょことありましたし。会長本人じゃないですけど、会として広報局長の米田さんから、先月だったかな、ニコニコ生放送に出て川崎の現状をしゃべってくれないかというのもありましたし。それと別に例の練馬区の江古田で慰安婦展の抗議街宣やるというので、私が主催でやりました。

8. 活動の持続

まあ、別に単に食べるだけだったら、(活動は) いらぬといえぬいらぬですよ。その中で一番大きかったのは、自分と同じ考え、あるい

はそれ以上のことをしようとしている同志がいる。ということに対して勇気付けられた。あとはさっきの妹の話じゃないですけど、俺も負けてられないなという考え、思い。その後いったん、これとも全然別の件で体の調子崩してやめちゃったんですけど、また新たに復帰して現在に至るという。

(活動を持続するエネルギーは) 会長へのカリスマ、もう1つはちょっと時間的にずれちゃうかもしれないんですけど、川崎という町への現状に対する怒りというか不信感というか、それですね。何で外国人の方が日本人より優遇されなきゃいかんのだ。その福祉給付金の例でいうと、当然ながら日本人にはびた一文払われないんですよ。基本的には日本人のお金です。もちろん徴収する市民税——外国人からとるのかな、川崎市の場合それがあてにならんのですよ——そういった行政に対する不信もありますし。外国人への怒りももちろんないわけではないですけど、それに便乗する日本人に対する怒りのほうが今は強いですね。

例えば、ついこの間もやってたんですけど、ついこの間まで川崎市の市議会に国旗立ってなかったんです。普通、例えば東京都議会とか岡山市議会だとかって、必ず日章旗が立ってますよね。あれが最後の最後までなかったのが、実は川崎市なんです。あれを何とかせいというので、陳情を出しまして——請願には時間なかったもので——その時に自民と民主と公明は賛成したんです。ところがこれに反対するのが共産党の佐野って議員がいて、これのお陰で全部パーになったんです。というのも、陳情が委員会で可決されるには全会一致が原則なんですね。なので誰か1人の反対があると全部おしゃかになっちゃうんです。それで私の陳情はご破算になっちゃった。ただその後うちの市議さんがいろいろ頑張って下さって、おかげさまで川崎市にもようやく日章旗と川崎市旗と両方立つようになりまして。その後また起こったのが、毎日新聞だったかが取り上げて、弁護士がこれおかしいんじゃないかというのが記事に載ってたんですね。もうふざけるなよ、日章旗を立てない議

会が馬鹿な議会というのがどこにあるのよ。そういう、本当に異常さが如実にあらわれているのが、川崎市なんです。

他にもねえ、外国人参政権ももともとは賛成派だったんです、川崎は。それをようやく、うちの会を最初に立ち上げて取り掛かったのがそれなんです、外国人参政権。陳情で出してはねられて、その後市議さんが頑張ってくれたお陰で、何とか辛うじて反対でなく慎重な審議を求める意見書の方は、可決させるのに成功しました。今の在特会に対して思うところとかなりかぶるんですけど、本格的に今の自分たちが考えていることをやるんだったら、政治を動かさなきゃいかんと。元々は桜井会長が、あの方がおっしゃってたんですけど——をやってる。自分のできる範囲で。そのためには当然政治家さんとも直接いろいろ話はしますし、陳情や請願も出しますし。行政とネゴシエートをやれる範囲でやりますし、そんなような感じで今はやっています。

やっぱり我が国は民主主義国家ですから、国民の声を何らかの形で上げていく——私はこれ権利ではなくて義務だと思ってますんで、それを果たしているというある種の充実感はあると思います。さっきお話しした品川区の問題、あれも多分、在特会が動かなければ多分成立してたと思うんです。あくまでも新聞報道でしか見てないですけど、どちらかというともまだ迷っていた節があったんですね、区長さんは。それをまさか多分、直接区役所の方にそんな問題が取り上げられると多分思ってたと思うんですよね、区役所の方は。あの顔は間違いなく（びっくり）してました。もちろん、今の在特会がやっているような居丈高な感じでなくて、こういう流れのネゴシエーション。私だってある意味初対面ですから、その方（区役所の職員）とは。「これがあって品川区に対して不利益ではないかと思うんですけど、考えていただけませんか」そんな感じ。

9. 結語に代えて

川崎といえば、外国人政策の先進地として知られ、全国にさきがけて市職員採用の国籍条項を撤廃したり、条例設置の外国人市民代表者会議を設立したりした（宮島 2000）。これは 1990 年代における「自治体の外国人政策」の一つの頂点をなしているが、その後の選挙で保守系の市長が就任してからは、停滞が目立つようになったといわれる（崔・加藤 2008）。本稿でみた S 氏の事例は、それからさらに排外主義運動まで生まれた川崎の状況に関する報告でもある。S 氏の運動は、抗議街宣やデモといった直接行動よりも、行政への陳情・請願を中心にしており、自民党の市議ともつながりを持って活動している。在特会が出発点だった活動家が、地域レベルで根を張って排外主義運動にいそむ状況は、さいたま市などでみられる。S 氏がそうであるように、直接行動中心の活動に不満を持ち、行政交渉を中心にするべきという者は一定数存在する。街頭でのヘイトスピーチが今年になって問題化しているが、「成果」を地味に追求する排外主義運動の動きがあることも見逃すべきではない。

文献

- 崔勝久・加藤千香子編, 2008, 『日本における多文化共生とは何か——在日の経験から』新曜社。
- 樋口直人, 2012a, 「在特会の論理(1)-(7)」『徳島大学社会科学研究所』25号。
- , 2012b, 「在特会の論理(8)-(9)」『徳島大学地域科学研究』1号。
- , 2012c, 「『行動する保守』の論理(1)-(3)」『徳島大学地域科学研究』1号。
- , 2012d, 「在特会の論理(10)」『大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター年報』8号。
- , 2012e, 「『行動する保守』の論理(4)」『茨城大学地域総合研究所年報』45号。
- , 2012f, 「排外主義運動のマイクロ動員過程——なぜ在特会は動員に成功したのか」『アジア太平洋レビュー』9号。

- , 2012g, 「在特会の論理(11)-(14)」『徳島大学地域科学研究』2号.
- , 2012h, 「『行動する保守』の論理(5)-(6)」『徳島大学地域科学研究』2号.
- , 2012i, 「在特会の論理(15)-(18)」『徳島大学社会科学研究所』26号.
- , 2013a, 「『行動する保守』の論理(7)」『アジア太平洋研究センター年報』9号.
- , 2013b, 「『行動する保守』の論理(8)」『茨城大学地域総合研究所年報』46号.
- , 2014, 『日本型排外主義』名古屋大学出版会.
- 宮島喬編, 2000, 『外国人市民と政治参加』有信堂.

(付記) 科学研究費補助金によるプロジェクトの一部として本稿のもととなる調査はなされており、稲葉奈々子、申琪榮、成元哲、高木竜輔、原田峻、松谷満の各氏との共同研究によっている。記して感謝したい。